

論 文

少年教育雑誌『とも』の研究 A Study of Educational Magazine "TOMO"

岡 谷 英 明

はじめに

中村正直はスマイルズ (Samuel Smiles) の『セルフ・ヘルプ』を翻訳することによって「立志」物語を提供した。スマイルズの『セルフ・ヘルプ』は13章から構成されており、その中には先達の成功秘話がおさめられていた。ニュートンはイギリスの農家に生まれ、出生前に父を亡くしているが、努力の末、世界的な物理学の発見を行った。ワットは長い間あまり理解されなかったが、ひたすら工夫を続け、イギリスの産業革命にとって画期的な発明を行った。中村正直は、志を立て忍耐・努力すれば偉業を達成できる、という「立志」物語を明治日本の儒教的な風土に合うように翻訳した。周知のように翻訳書『西国立志編』は、明治の初頭、若者たちの生き方に大きな影響を与えたのである。

明治の出版メディアは「立志」物語をこぞって供給した。『西国立志編』は明治13年頃まで教科書に採用され、版を重ねた。『少年立志編』『小学立志編』『明治立志編』といった『西国立志編』の類書も数多く出版された¹⁾。前田愛はこの『西国立志編』が「立身出世主義」という精神風土形成に果たした役割を解明する研究が必要であると述べており²⁾、近年この課題を解決しようとする研究が少年教育雑誌の分析を通じてなされている³⁾。キンモンスは少年教育雑誌『少年園』などの投稿欄から「立志」の社会史を明らかにした。また『成功』などから立身出世主義の社会を分析した竹内洋の研究もその一環とみることができる⁴⁾。

だがこれらの研究において地方の少年教育雑誌は僅かしかとりあげられておらず⁵⁾、雑誌がおかれていた地方の状況はあまり考慮されていない。雑誌出版はその地方の読者を対象に行われ、雑誌を支える記者の興味によって雑誌内容も左右されよう。少年教育雑誌のおかれた状況を考慮に入れながら、「立志」物語がどのように提供されていったのかという問題を明らかにすることは、「立志」物語が明治の精神風土形成に果たした役割を解明する上で重要であると考えられる。

本稿では『とも』をとりあげ、この課題に取り組む。『とも』は明治22年岡山県の津山で創刊された。明治20年代、岡山県でも少年教育雑誌の出版が相次いだ。明治22年には『をしえ』『学びの枝折』、明治23年には『わらんべ』『文海』『眞金響』『学之園』、明治24年には『文明之児童』が発刊されている⁶⁾。『とも』はこうした多くの雑誌とともに地方に誕生した。『とも』は自らを「僻地の一小雑誌」と認め⁷⁾、さらに津山というとりわけ「立志」や「東京遊学」へのあこがれの強い地域で出版された。本稿では、まず『とも』について紹介し、つづいて『とも』の読者が「立志」物語をどのように消費していたかをみる。次に『とも』が膨らみすぎた「立志」への思いを断ち切らせる役目を果たし、かわりの「立志」物語を提供したことを述べる。以上のことを通じて、『とも』が津山という状況においてどのような雑誌であったかを明らかにしたい。

1 少年教育雑誌『とも』

『とも』についての研究は、管見の限り、これまでの少年教育雑誌研究、あるいは郷土史研究においてはほとんどなされていない。先に挙げた『文海』『文明之児童』も同様で、これらの少年教育雑誌はその存在の紹介はされているが、内容にふみこんだ研究はみあたらない⁸⁾。では、『とも』とはいったいどんな雑誌であろう。まず『とも』の編集者について紹介するところからはじめよう。



『とも』の編集者は仁科久造である。仁科は津山町大字堺町12番地で、津山仁科照文堂という書店を経営し、さまざまな書籍を発行していた⁹⁾。正岡子規の友人であり津山中学校の教師でもあった大谷是空の『校正作陽誌』（明治27年11月刊）や『是空俳話』（明治29年2月刊）などはこの津山仁科照文堂から刊行されている¹⁰⁾。詩人矢野峰人も明治30年代「津山の町には仁科照文堂という老舗が唯一軒あり…私は投書雑誌を立ち読みするため、かなりひんばんにこの店に入りました」と述べているようだ¹¹⁾。

仁科はおそらく明治22年10月5日に『とも』を創刊した¹²⁾。創刊の経緯はよくわかっていないが、創刊後『とも』は多くの読者を獲得していったと思われる。「今や『とも』は実に一万有余の読者を有せり東辺西陲到る所として読者あらざるなく之を府県にしては到らざるの地なく之を国にしては二三を除くあるのみ而して之を他邦にしては朝鮮あり香港あり蓋し予想の外に出づ」¹³⁾。朝鮮や香港に読者をもっていたかどうか

についての確証を得ることはできないが、『とも』の売捌所からみるならば、販売圏域は、ある程度の広がりをもっていたといえるかもしれない。『とも』の大売捌所は岡山市の武内教育書房、津山市の津山朝栄社¹⁴⁾、鳥根県松江市白濁本町の盛進堂¹⁵⁾である。『とも』は津山市を中心に北は松江市、南は岡山市を結んだ圏域で読まれていたといえよう。

地方の少年たちに読まれた『とも』の内容はどのようなものであったろう。その内容は同時代の少年教育雑誌『わらんべ』に掲載された広告からある程度イメージすることができる。「小学校生徒諸君必読の良雑誌とも石版摺鉛筆画手本入 定価貳銭郵便税一部五厘前金にあらざれば通送せず 右とも本月第六号を発行するに至り候処発行以来引続き非常の喝采を得追々盛大な趣き毎号数千部を増加致候これ全く諸君の御愛顧厚き処と奉深謝候就ては今回より各府県教育諸大家に請ひ學術論説及歴史理科地理農学技芸算術及修身教育小説其他種々有益（な）る事項を広く相集め掲載し且又紙上の改良致候間不変陸続御講読の程伏て奉願候也」¹⁶⁾。年代によって内容に変化があるが、『とも』には學術論説から教育小説までさまざまな記事が「友の告げ」「友の話」「友の群」「学びの林」「道の志るべ」「玉の屑」「寄書」といった目次に分類され、掲載されている。

『とも』の特色は津山洋学と深く関連している。「学びの林」に掲載された自然科学の話は算術から医学まであり、中には読者層である高等小学校生にとって高度な内容も含まれている。「算術問題」（5-28号、28号は「算術雑録」）、「動物小話」（14-26号）、「地学雑記」（18-26号）、「植物小話」（18-23号）、「化学」（18-20号）、「理科の話」（18-26号）、「人体生理的現象の一斑」（13-25号）などが連載されている。その他に「人体の皮膚の温度」（5号）「頭髪の変色と精神の変動」（21号）などの単独の記事があり、そのほとんどが洋学、とりわけ博物学との関連を連想させる記事となっている。江戸後期、箕作阮甫などがつくりだした津山洋学の雰囲気、明治20年代の地方都市津山で発刊された雑誌の中にも、息づいているといえよう。

その他『とも』には、存外、歴史の話が多い。「学びの林」には「作文のたすけ」(13-15号)といった文章錬成の連載もあるが、「歴史筌蹄」(13-20号)、「史話」(14-28号)、「明治偉人言行録」(23-25号)、「日本事始め」(24-26号)、「欧州近代音楽歴史」(18-21号)といった連載が紙幅を占めている。紀行文も多い。紀行文には「奈良みやげ」(26-28号)、「汽車にて名所巡り」(21-26号)が連載されている。

「玉の屑」には津山の歌会と思われる「鶯蛙会」で発表された作品が紹介されている。その中には津山東町林田出身の直頼高、津山札屋出身の梶原篤敬、津山の近隣、加茂村出身の太田原良当といった岡山県の短歌界をリードした文化人たちの和歌があり、『とも』は津山の文化とも深く結びついていたといえよう。

2 読者のディスクール

『とも』の読者は『西国立志編』や「立志」物語を積極的に消費していた。読者のディスクールを投稿欄「友の群」からひろいあげ、その消費の様子についてみていこう。

「友の群」に掲載された投稿文の総数は213であった。投稿少年の出身地は岡山県、島根県を中心に、東は茨城県、西は鹿児島まで広がっている。また懸賞文題に投稿した少年の年齢はほぼ8歳から15歳の間であり、投稿家には青年が若干いるものの、そこに記された年齢を平均すると13.6歳であった。彼らは次のような投稿文を送っている。

「西哲曰ク人ヲ成就スルモノハ安逸ニ在ラスシテ勉強ニ在リ容易ニ在ラスシテ艱難ニアリ然レハ人生何ノ地位ヲ論ゼズ艱難ノ事ト戦ヒ勇カヲ奮ヒ勉メテ之ニ打ち勝ツニ非サレハ決シテ大事ヲ成就スルコト能ハザルナリ…凡ソ人事業ヲ成就スルニハ剛毅ナル心志ヲ以テ基礎ト為スベシ心志剛毅ナルモノハ煩勞辛苦下賤ナルコトヲ厭ハズシテ勉メテ之ヲ為スカ故ニ一生ノ間必ず成功アルベシ…古ノ英雄豪傑ノ克ク大事業ヲ成就シ芳名ヲ天下ニ轟カシ万世人ノ亀鑑トナリシ所以ノ者ハ皆ナ其心志ノ致ス所ニシテ必ラズヤ夥多ノ錯節ニ逢ヒ櫛風

沐雨艱難ヲ嘗メ志望ヲ変セス」¹⁷⁾。

「西哲曰ク一國ノ貴マルルノ位価ハ某人民ノ貴マルル者ノ合併シタル位価ナリト人民ノ強ハ即チ邦國ノ強ナリ人民ノ弱ハ邦國ノ弱ナリ之ヲ譬ヘバ猶ホ影ノ形ニ從ヒ響ノ声ニ応スルガ如シ邦國ハ影ニシテ人民ハ形ナリ」¹⁸⁾。

ここには明らかに『西国立志編』の影響がみてとれる。おそらく「西哲」とはスマイルズのことであろう。「一國ノ貴マルルノ位価ハ某人民ノ貴マルル者ノ合併シタル位価ナリト」とは「國之強弱ハ。人民之品行ニ関ハル」という『セルフ・ヘルプ』の理念そのものであり、「成就スルモノハ安逸ニ在ラスシテ勉強ニ在リ容易ニ在ラスシテ艱難ニアリ」とは成功者の人生哲学を紹介した『西国立志編』の真髓であった。

『西国立志編』では多くの成功者の事例があげられている。とりわけイギリスの栄光、すなわち産業革命や自然科学にかかわる人物のエピソードが事例として取り上げられた。その代表者はワット、ニュートンなどであった。彼らの名前も『とも』読者の口をついてでてくる。「許多ノ苦ヲ耐ヘ然ル后其目的ヲ上達セシナリ彼ノ『ワット』ノ蒸氣発明ニ於ケル『コロンブス』ノ亞米利加大陸發見ニ於ケル『フランクリン』ノ電気発明ヲ於ケル皆然リ」¹⁹⁾。「先哲ノ語ニ鑑ミ広ク之ヲ古今ノ实例ニ徴スルニ精神ノ到ル処豈何ゾ透徹セザルノ理アラヤハ帝ナホレオン曰ク出来ヌト言フハ愚人ノ寝言ナリト…彼ノニュートンノ幼兒ヲ見ヨ其初メ馬鹿童兒ト呼バレシモ遂ニ一心貫キ得テ古今無双ノ理学者トナリシニ非ズヤ又看ヨ夫ノコロンブスガ新世界發見ノ挙ヲ看ヨ実ニ多年ノ経験ヲ積ミ許多ノ辛酸ヲ嘗メ来リテ以テ此目的ヲ遂成セシニ非ズヤ」²⁰⁾。少年たちの投稿文の中には『西国立志編』に登場した人物が次々と引用されているのである。

さらに「立志」を遂げようと努力している友にもエールが送られている。「人ノ斯世ニ生レテ困難ヲ辞セズ艱苦ヲ避ケズシテ其業ニ就ク者亦一ノ志アルヲ以テナリ…岡山県尋常師範学校ニ入ラントス嗚呼君ノ此行ヤ実ニ羨ム可ク実ニ慶賀スヘキナリ」²¹⁾。「旅装ヲ整ヘ学友相伴シ以テ客舎ヲ発スルモノハ余等遊学ノ途次ナ

リ…嗚呼余等今笈ヲ負フテ東都ニ遊バントス恰モ稲苗ヲ移シテ本田ニ植ユルガ如シ彼ノ黄雲ノ穰々タルガ如ク学業成熟錦ヲ着テ故郷ニ帰ル将タ何レノ時ゾ想フニ其艱難辛苦何ゾ農夫ノ労働ニ譲ランヤト」²²⁾。志の貫徹に向かって努力をおしまず進んでいく同世代の姿が「立志」共同体を形成していく。投稿少年たちは投稿文を通じてお互いの価値観を共有していくのである。

読者のディスクールをみると『西国立志編』がよく読まれていることがわかった。だが、『とも』の読者は『西国立志編』の表層的な理解のレベルにとどまっているように思われる。そもそも『セフル・ヘルプ』の背景には科学実証主義と経済的合理性についての理解があった。しかし、忍耐や勤勉といった少年たちが目標としている品性は結局「身を立てる」ために必要とされた。科学的な発見や発明の「こつ」は人生成功の哲学へと転換されている。こうした傾向は全国的なものであったが、『とも』の読者たちはそれ以上に積極的に「立志」物語を消費しようとしているのである²³⁾。

3 『とも』からのメッセージ

『とも』の読者が「立志」物語の積極的な消費者となっていることをみると、『とも』の役割は「立志」物語を提供し、少年たちの「立志」熱をヒートアップさせることにあったのだろうか。次に『とも』から発信されたメッセージに目を向けてみよう。

『とも』の記者たちは少年たちの学習のモチベーションとなるようなメッセージを常に送つづけている。メッセージはいたるところで発せられているが、とりわけ巻頭に置かれた「友の告げ」がメッセージ発信の役割を果たしていた。

「友の告げ」では表1のような記事が掲載されていた。とりわけ「光陰は駒隙」という記事では「立志」が読者に直接促されている。「嗚呼我親愛なる『とも』の友なる諸君よ君等が立志の機は既に熟せるぞ躊躇猶予して百年の悔を残す勿れ『いたづらにすぐる月日は多けれど道をもとむる時ぞすくなき』諸君彌を勉めよ」

表1

号数	記事名
5号	「郊外の校」
6号	「光陰は駒隙」
13号	「勉強の好季」
14号	「謹むで愛読者諸君に謀る」
15号	「道徳に就て」
18号	「艱難と勇氣」
20号	「妄測専断」
21号	「巧遅者ハ拙速ニ如ズ」
22号	「勉強のことに付て」
23号	「敢て学生諸子に告ぐ」
24号	「第二週年の辞」「独立の気概」
25号	「農業界の少壮者に望む」
26号	「善き習慣を造れ」
28号	「新年の辞」

²⁴⁾。記者たちは読者である少年たちを急き立てる。読者とはにかくはやく志を立て、目的に向かって努力するように促されるのである。

その際、時間的余裕がないことが少年たちに強調されている。他人におくれをとるよりは、拙速でもよいという記事すらみられる。「吾人は固より小成に安ぜよとは云はず又強ち巧遅の主義を排せず大器晩成の方針を難ずるものにも非ず勿論或部分に向ては巧遅を望む然れども普天率土の広き人類の多き之等をして悉く遅きも巧なるの主義に基き其身を処せしむるに於ては社会は將に渋滞不動腐敗して復如何ともすべからざるに至らんとす…夫れ人は想像の動物なり而して少年は其の最なるもの也是故に時に或は処に或は是空に向て功名富貴の蜃樓を描き烏有に於て豪華愉快の樂園を作る然りと雖も是れ特に率直氣隨の想像にして複雑必至の実地と大に異り之を譬ば少年の想像は単純なる直線にして実地は凸凹ある曲面なり曲面と直線と密接せざるは幾何学の原則にして想像と実地と一致せざるは心理学の理法なり²⁵⁾。「巧遅」は「拙速」より劣ると考えられ、時間的余裕がないと急き立てられているのである。

『とも』がこのように少年たちを急き立てたのには、実は理由がある。明治20年代すでに「立志」を受け入

れる社会は渋滞していた。明治初期には時々「僥倖（こぼれさいわい）」を得て「立志」を遂げるものもあった。しかし明治20年代ともなると「正統な順路」を歩まなければ成功へ達しない時代になっていたのである²⁶⁾。

したがって少年が簡単に「功名富貴の蜃楼」を描き、「豪華愉快の楽園」を作ることができると考えていたとすると、それは少年の単純な「立志」のイメージでしかない。実際には「世の学生たるもの多くは虚譽を貪り小成に安んじ…學術の蘊奥を攻めず徒に身辺を盛飾し妄に文筆を弄し或は大言壯語以て畢生の能事とんす²⁷⁾」るものであったらしい。「凡そ少年の士が其志を立てるや自己の境遇を忘れ好尚の適否を顧ず従て資力の如何に想及せざるもの如く単に偉業を奏し令名を得んとするものに似たり…」²⁸⁾。記者たちは読者に自らの境遇をしっかり把握するようにと諫めるのである。

自己のおかれた境遇を忘れがちな少年たちのために「友の話」では「目的を定めて学問なされ」という興味深い具体的な助言がなされている。「皆さん小学校に在る時分から実業に就く階梯の学問をなさりませ官員となりて月給を取る目的は甚だ悪しくあります去りながら資本なきものは月給取りが一番口過ぎの早道でありますれば左様万止むを得ず…自治の政治の盛んになり行く今日官途に就き月給を取らふとする大間違なり今迄は学士博士の官途に就き多くの月給を取るものありしも今後は個様の人樹にて量るも数へられぬ程多く出来供給は多く需要は少なき経済学の理で官吏となりし人の利益は甚薄くなります²⁹⁾」。志を立て努力すれば大きな成功を得るという物語はそろそろ幻想になりかけ、もし少年たちの「立志」物語を完結しようとするれば、周到な計画が必要とされたのである。

周到な計画とともに「渋滞社会」では学問を究め、学士博士の官途につくというような大きな志を立てることは変更を余儀なくされる。水戸在住の安東金治郎は「古来我国ノ風習トシテ殖財ノ業ハ賤夫ノ業ナリ³⁰⁾」とされているが、殖財は愛国の一端を担い、立志の別のあり方だと称揚している。「凡ソ殖財トハ資本

ヲ用ヒ必身ヲ勞シテ新タニ物品ヲ産出シ其物品ヲ売買シテ以テ利益ヲ得ルニアリ故ニ道德及ビ法律ノ区域外ニ出デザル限リハ決シテ憚カル可キコトニアラザル…敢て問フ少年諸君ヨ諸君ハ能ク後來ノ商軍ニ將タルノ覚悟アリヤ幾万人ヲ支使スル大農工場ニ主タルノ目的アルヤ³¹⁾」。読者の中にいたであろう士族の子弟にとって、殖財をなし「商軍」となることにはかなりの抵抗感があったと思われる。しかしそれを乗り越えなければ「渋滞社会」において「立志」を完遂することはできないと『とも』はいうのである。

4 東京遊学という「立志」

このようにみえてくると、『とも』が必ずしも「立志」をおおっていたとはいえないことに気づく。『とも』はむしろ「立志」熱のクールダウン装置の役割を果たしていた。『とも』が東京遊学³²⁾という志を立てることをどのように考えていたかについてみれば、このことはさらにはっきりする。



『とも』は東京のイメージと「立志」物語を重ね合わせている。とりわけ「玉の屑」に掲載された長編では「立志」が東京のイメージと結びつけられている。「玉の屑」には、その名前からもわかるように、そもそも断片的な記事ばかりが掲載されていた。だが、「玉の屑」には内容の似かよった三つの長編も掲載されている。「蛍雪の光月花の影 みがかぬ璞」(5-6号)「わだち」(17-26号) および「反対なる少年」(28号)である。この長編を中心にイメージの重なりをみてみよう。

「蛍雪の光月花の影 みがかぬ璞」の主人公は山縣秀太郎と黒川多賀吉であるが、その中で東京は次のように描かれている。「英国倫敦に擬ふべき東京の地は流石中央政府の在る所市街の盛昌なる車馬穀擊行人肩摩電線は蛛糸の如く街頭に経緯し高樓は鶯を列ねて雲間に聳ゆる斯くも壯麗なる都会」³³⁾。この壯麗なる東京を訪ねた黒川多賀吉は東京という刺激から自らの「立志」への思いを新たにしている。「モシ山縣君実に東京は我邦の大都府ほどあって素敵に豪盛なものだ初めて出た田舎者が銀座の或る新聞社に賚銭を投げたとやらいふことだが僕も知れんテ…斯う初めて来て見れば何も彼も皆な我が眼を驚かさないものはない之に就けても早く身を立て家を起すの策を講せねはならない」³⁴⁾。黒川多賀吉の父母は東京へ出ることを嫌った。だが、黒川多賀吉は「学問で身を起さん目的」のために郷里で教員となり、その月々の給料を積み立て、東京を訪れたのである。

また「わだち」の中でも「立志」と東京のイメージの興味深い関連がみとれる。「此地は名にし負ふ中国にての繁都にて師範学校の在る所なり翌日は試験を受くべき日なれども固より落第すべき覚悟にて絶て及第を望まざれば別に気に留むることもなく心静かに眠に就けり…試験場には二百名に近き志願者は各々堅唾を呑んで控へたり人は登第せんが為に苦み予は落第せんが為に悩む…」³⁵⁾。「わだち」の主人公望月輝雄は学問の道で成功することを夢み、師範学校進学をわざとあきらめてまで、東京遊学を目指している。志の行き着くところは中国地方にある師範学校ではなく、あくまでも「東京」なのである。

策略をこらしやっとなつた東京遊学であるが、「地方の少年が無闇に東京へ出て資金もなく目的もなく困難なものが多い」³⁶⁾ ことが『とも』の中でしばしば問題となっている。「仮し資力は支へ得るにも飛んだ修業に身が入り放蕩ものとなつた末郷国へ帰るは珍しくないことで…」³⁷⁾ あつた。実際、「わだち」の作者鷺のやは、望月輝雄に「予が在郷の日に描きたる充全なる模型も田舎思想にて作られたるものから一も實地に其用を為さず」³⁸⁾ と語らしめている。そもそも

「わだち」という題名は鷺のやが「前車の轍は後車の戒めにもと思へるまま世の少年諸子に益せん」³⁹⁾ という目的をもって名づけたものであつた。当時、多くの少年教育雑誌に東京遊学の記事が掲載されていた。しかし、地域に根ざした地方誌としては東京遊学の現実もまた知らせておくべきであつたのであろう。鷺のやは東京遊学のモデルを事細かに描きながらも、東京遊学の現実の厳しさを教えているのである。

ただし、単純に東京遊学の現実の厳しさがあつたということだけで、こうした記事が書かれたわけではないであろう。『とも』には都会に対する反撥があつたことも見逃せない。すでに述べたように『とも』は「第二周年の辞」で自らを「素と之れ僻地の一小雑誌たる」とし「都雅優美の觀を欠く」と評している。しかし、自らを卑下する裏には「英国倫敦に擬ふべき」東京という都会に対する反撥もある。都会への警鐘は『とも』の至る所でなされている。『とも』の記者である錦川漁夫は「世界第一の商業地英国倫敦の煙價」という記事を掲載し、繁榮の裏にある落とし穴について気付かさせている。「博士ロバートと申します人は、倫敦にて日々空中に飛びます石炭の煙は、炭五十屯（我国の目方で凡一万三千六百貫余）と水炭瓦斯炭酸瓦斯二百五十屯（六万八千貫）を、含で居りまして毎歳消費します、…又シュレフエヴィール氏は、兩議員のみにて毎歳煤払に二千五百ポンド（我金貨一万二千五百圓）を要すと説きましたが、何しろ驚く可き商業隆盛の所ではありませんか、げに英国は世界第一の富国だと申しますが、誠に故あることであります、但し其の石炭煙が暁霧に混ざる為、此より種々の病氣を醸し、実に倫敦死者の四割は、其が為だと申します、宗とすると又恐ろしいことではありませんか」⁴⁰⁾。地方少年教育雑誌は都会の恐ろしさを教え、少年たちの「立志」への思いをなんとかとどまらせようとしているのである。

5 小さな「立志」物語

『とも』は少年たちに対して東京遊学への思いをた

ち切らせ、「立志」の芽を摘む役割を果たした。そう簡単に言い切ることもまた実は正確ではない。

たしかに『とも』の意図は読者に伝わっている。「夫レ東京ハ文学ノ淵藪ニシテ四方学士ノ集所君ノ此ニ笈ヲ負ヒヤ其志偉且ツ壮ナラズ哉然レドモ一利ノアル所害亦從ヲ免レズ君之ヲ鑑ミ朝ニ芳原ノ花ニ吟ジ夕ニ品川ノ月ニ酔ヒ遂ニ遊治郎トナリテ嗤笑ヲ招ク勿レ…嗚呼君ヨ君ヨ艱難ノ勉勵今ニアリ此機過グ勿レ」⁴¹⁾。「友人ノ東京ニ遊学スルヲ送ルノ序」という投稿文を書いた丸橋は都会の危険性をきちんと認識しているのである。

当時、津山からは江戸時代の後期から多くの貢進生が東京に遊学しており、すでに学界で活躍していた。鳩山和夫、磯野計、久原躬弦は大学南校に入っている。とりわけ久原は後に京都大学の学長になり、津山の名門箕作家からでた菊池大籠も後に東京大学の学長になっている。こうした人物の成功によって、津山の少年たちの「立志」への思いは大きく膨らみすぎていたと考えることもできる。それゆえ膨らみすぎた「立志」への思いをクールダウンする必要が当時の津山にはあったのである。

しかし『とも』はすべての「立志」の芽を摘んではいない。『とも』は他方で少年たちにいわば小さな「立志」物語を提供している。

『とも』は、三号雑誌と呼ばれる短命な少年教育雑誌が多い中、しばしば誌面を改良し、進化を図っている。「夫れ適者は生存して而して益々發達進化するは物の常数なりとは弊舗の曾て耳にする処に御座候本誌従来の小冊子には誌面手狭に付沢山の玉稿をして空く塵埃とと共に筐底に委棄せしむるの恐有之斯くては誠に不本意恐縮の至諸君に対し弊舗自らに対し未だ尽さざる様愚考仕旁々以て此際一段の改革致度即ち従来の誌面を拡張し少年園位の大きと致し記事体裁等何か注意相加へ一番面目を添へ以て本誌の現勢に順応せしめ…」⁴²⁾。『とも』は少年投稿家の「沢山の玉稿」を掲載するために誌面を改良すると宣言し、投稿を誘っているのである。

投稿を誘発するために『とも』はまず自らの身体を

有名少年教育雑誌に近づけようとしている。「従来の誌面を拡張し少年園位の大きと致し」とあるように進化の先を『少年園』にしている。さらに『とも』は記事内容を東京の有名少年教育雑誌に近づけようとしている。「本誌は当時東京にて有名なる江見水蔭氏と特約を結び流麗快活にして少年界を益すべき新小説を掲ぐべき予定なり」⁴³⁾。江見水蔭は巖谷小波らと同様、東京の博文館に入社し、同館発行の『少年世界』などで主筆として活躍していた人物である。『とも』は自らを東京のイメージに進化させ、そこに氏名が記されることの価値を高めているのである。

『とも』のこの目論見は成功したように思われる。地方の少年たちは投稿欄に熱心に投稿し、名前を載せることで存在を示そうと志を立てるのである。

都会の少年たちは文章の投稿よりも「考え物」への投稿のほうが熱心であったと津山の近隣勝間田町出身の作家木村毅は話している。「芥川龍之介なんかは『少年世界』に出していても、ほくらより一年前で考え物に名を出していても文章は出しておらんのですよ。あれはやっぱり都会人だからな」⁴⁴⁾。都会の少年たちは地方と比べてさほど文章を投稿していない。これに対して、地方の少年たちは都会の少年たちのように自らの雑誌をつくるができなかった。それゆえ地方の少年教育雑誌へ一生懸命文章を投稿するのである。

投稿欄に自らの名前が掲載されることはたいへん名誉なことであったろう。投稿欄「友の群」に記事を掲載された投稿家は注目の的であった。奥りよは「友の群に登る人々は麟明鳳友其吐く処其語る処鏘々として金石の響あり」⁴⁵⁾と述べ、そのあこがれを吐露している。

しかも『とも』の有名投稿少年たちは地方にあって身近でなおかつ優秀な存在であった。『とも』第24号の懸賞登科文で甲科をとった難波大吉は「平素質直寡言修養是勉」であり、「人皆期其大成」のような地域の秀才であった。難波大吉は高等勝南小学校の卒業式で告別の辞を述べ、その後、家計に負担をかけないですむよう陸軍の砲兵工科学校へ入学、同卒業後明治32

年には士官学校へ入校している。惜しくも、日露戦争に出征、奉天で亡くなるが、その葬儀には小学校の校長が会葬しているほどであった⁴⁶⁾。「立志」を完遂すべく努力している人物が身近な存在として可視化されていたことは、少年たちの「立志」熱に火をつけたであろう。『とも』に登場する人物がまた新しい小さな「立志」物語となって、さらに「立志」熱が高まってゆくのである。

その結果、毎回多くの文章が投稿されてきた。「本誌発刊以来毎号掲ぐる所の懸賞文及び筆跡に應ずる士毎に千を以て数ふるに至る之れ実に昭代の餘澤文華の反映国家の為賀すべき事たり」⁴⁷⁾。『とも』は「立志」のエネルギーを「友の群」に方向転換させることにうまく成功しているように思われる。

おわりに

大きな志を立てることを諦めさせ、小さな志を立てさせる。このような転換を『とも』は果たそうとした。この転換にみられる中途半端さは『とも』がもつ「半官半民」という性格に起因しているように思われる。

『とも』は、『少年世界』といった民間雑誌とは異なって、商業主義に陥らない部分をもっている。『少年世界』といった雑誌が民間から発行されているのに対して、『とも』の記事を書いた記者の多くは地域の高等小学校の教育者たちであった⁴⁸⁾。津山の鶴山高等小学校、津山近隣の勝南高等小学校などの教師が『とも』に記事を送り、『とも』を支えていたのである。ちなみに『とも』には別冊『文華之園』がでていますが、この別冊の監修も東京女子師範学校教授大村斐夫であった。それゆえ『とも』は「立志」物語を大量に供給し、少年たちの幻想をあおるだけではすまされなかった。一方で「わだち」「螢雪の光月花の影みがかぬ璞」といった物語を提供し、大きな志を立てることを諦めさせなければならなかったのである。

とはいえ『とも』は津山仁科照文堂という民間雑誌社から発刊された雑誌であり、たくさんの短命な雑誌が存在するという出版状況で生き残るために、少年の

「立志」をくじくだけではすまされなかったであろう。「僻地の一小雑誌」、「都雅優美の観を欠く」と自称する『とも』は自らが志を立て、成功をおさめるよう努力している。『とも』は江見水蔭の小説を掲載し、『少年園』と似かよった装丁にすることによって自らを進化させ、東京のイメージに近づけようとしている。『とも』はこうした装置により自らに投稿者の名前を載せるといった欲望を作りだし、投稿欄における「立志」物語を商品化する。『とも』は「東京遊学」という実際の「立志」物語のかわりに、投稿文を載せるという別の商品を提供し、少年たちはこの商品を積極的に消費して行くのである。

『とも』はこのように「半官半民」という性格をもっていた。今後の少年教育雑誌研究は、地方の状況と地方の少年教育雑誌が持つ性格とが「立志」物語の供給と消費のしかたに影響を与えている、という側面を考慮する必要があるだろう。

註

- 1) 山宮允「『西国立志編』及びその類書について」『学燈』第43巻第2号、1939年、20-25頁。
- 2) 前田愛「立身出世主義の系譜」『近代読者の成立』岩波書店、1993年所収、117頁。
- 3) キンモンス、広田他訳『立身出世の社会史』玉川大学出版部、1995年。竹内洋『立身出世主義』日本放送出版協会、1997年。星新一『明治の人物誌』新潮社、1999年。
- 4) 竹内洋『立志・苦学・出世』講談社、1991年。
- 5) キンモンス、前掲書、116頁。
- 6) 片山・桑田・菱川『明治の岡山の雑誌』日本文教出版、1989年、9頁。
- 7) 「第二周年の辞」『とも』24、1頁。
- 8) 雑誌の存在を簡単に紹介しているものには、前掲書『明治の岡山の雑誌』の他、吉崎志保子「明治三十年代の岡山の文芸雑誌（前期）—新派歌人を中心に—」岡山地方史研究会『岡山地方史研究』57号、1988、2-3頁などがある。『わらんべ』には酒井晶代「明治中期における幼年雑誌出版と地方—岡山で創刊された『わらんべ』を中心に」（『国際児童文学館紀要』第10号、1994年）という研究がある。
- 9) 照文堂は現在も津山市堺町に存在している。仁科久造に

- は子どものがいなかったのか婚養子をとっている。現在の入矢社長が四代目。三代目は入矢強会長である。会長の代に津山仁科照文堂を譲り受けている。また、岡山の短歌界では有名な明治の雑誌『暁星』を発売したのも津山仁科照文堂である。
- 10) 「大谷是空の生涯と文学—正岡子規との交友を中心として—」『正岡子規と大谷背空』津山郷土博物館, 1996年, 50頁。
 - 11) 小山健三『作州からみた明治百年(上)』津山朝日新聞社, 1970年, 213-214頁。
 - 12) この創刊号は未だその存在も確認できていない。しかし, 第5号が明治23年2月5日であり, その後毎月5日に創刊されていることから考えて, その創刊は、『明治の岡山の雑誌』と同様, 明治22年10月5日と推測できよう。また, その終刊の経緯もわかっていない。したがって, どのような目的で創刊され, どのような経緯で廃刊になったのか, その様子は判然としない。
 - 13) 「謹て愛読者諸君に洗告す」『とも』14, 43頁。
 - 14) 後に椿朝栄社, 津山朝栄社は椿清吉の印刷会社。
 - 15) 22号からは生野五郎左右衛門となっている。
 - 16) 「広告」『わらんべ』第貳号, 細講舎。文中(な)は論者。以下, 引用文の旧字は新字体に改め, ルビは省略した。
 - 17) 「立志論」『とも』24, 37-38頁。
 - 18) 「国依於民説」『とも』24, 39頁。
 - 19) 「忍耐の説」『とも』28, 36頁。
 - 20) 「成ラザルニアラズ為ササルナリ」『とも』15, 46頁。
 - 21) 「友人藤園中村君ノ岡山県尋常師範学校ニ入ルヲ送ルノ序」『とも』22, 54-55頁。
 - 22) 「秋暁客舎ヲ発スル記」『とも』15, 30頁。この「秋暁客舎ヲ発スル記」は懸賞で甲科をとっている。
 - 23) キンモンス, 前掲書, 111-142頁。
 - 24) 「光陰は駒隙」『とも』6, 1頁。
 - 25) 「巧遅者ハ拙速ニ如ズ」『とも』18, 1-2頁。
 - 26) 竹内洋, 前掲書『立志・苦学・出世』, 56頁。
 - 27) 「敢て学生諸子に告ぐ」『とも』23, 1頁。
 - 28) 「独立の気概」『とも』24, 2頁。
 - 29) 「目的を定めて学問なされ」『とも』6, 28-29頁。
 - 30) 「殖財モ亦愛国ノ一端ナリ」『とも』15, 25頁。
 - 31) 「殖財モ亦愛国ノ一端ナリ」『とも』15, 25-26頁。
 - 32) 酒井晶代「もうひとつの〈東京遊学案内〉—明治二〇年代の幼少年雑誌に描かれた遊学少年たち—」日本児童文学学会『児童文学研究』第29号, 1996年, 1-12頁。
 - 33) 「螢雪の光月花の影 みがかぬ璞」『とも』5, 19頁。
 - 34) 同上。
 - 35) 「わだち」『とも』22, 25-27頁。
 - 36) 「わだち」『とも』24, 21頁。
 - 37) 同上。
 - 38) 「わだち」『とも』25, 26頁。
 - 39) 「わだち」『とも』26, 26頁。
 - 40) 「世界第一の商業地英国倫敦の煙価」『とも』13, 14-15頁。
 - 41) 「友人ノ東京ニ遊学スルヲ送ルノ序」『とも』18, 48頁。
 - 42) 「本誌大改良ニ付愛読諸君ニ御相談」『とも』14。
 - 43) 「新小説掲載予告」『とも』28, 42頁。
 - 44) 木村毅『明治の春秋』講談社, 1979年, 51頁。
 - 45) 「静水女子様へ」『とも』13, 28頁。
 - 46) 中村勝男編著『資料が語る明治の高等小学校—岡山県勝南郡高等勝南小学校を中心に—』(自費出版), 1997年, 532-533頁。
 - 47) 「敢て寄稿者諸士に告白す」『とも』23, 38頁。
 - 48) 誌面の都合上, このことに関しては別稿に譲りたい。

(2000年12月1日 受理)